
女神と私の108の約束

高里奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神と私の108の約束

【Nコード】

N4665P

【作者名】

高里奏

【あらすじ】

どこにでも居る本屋のアルバイトの私は、ある日突然女神様に「憑かれて」しまう。そんな私は女神様にたくさんのことを教わって、いつしかそれは約束になった。

お金はちゃんと払いましたよ

それは突然だった。

私はどこにでも居る、フツの本屋のアルバイトで、その日も客が少ない中ぼんやりとしながらブックカバーを折っていた。

時折、客が買っていく本からその客の趣味や職業を推理したりして勤務時間の終わりを待つことは既に日課だ。

そんな日々の中で、それは突然だった。

いつものようにぼんやりとブックカバーを折っていた。そうしてぼんやりと棚の間の通路を眺める。いつものことだ。

そんな通路に、妙な客が居た。

いや、それは客ではなかった。

ぼんやりと、薄っすらと光る女性。彼女はとても輝かしい笑顔で編み物の本を眺めていた。が、どう見ても人間ではなさそうだ。

なにせ透けている。

私は目を疑った。幽霊ではないかと。

そうやって二度ほど凝視していると、彼女は私を見て微笑んだ。

- 私が見えるのね -

彼女は妙に嬉しそうだった。

憑かれる。本能がそう感じた。

案の定、それは当たり前、自宅に着いても、彼女は居た。

「あの、どちら様ですか？」

「ディアーナ、人の子は私をそう呼ぶわ」

美しい女性はそう言った。

「月の女神？」

「そう、呼ばれたこともあった」

彼女は常に曖昧にしか答えない。

「浮幽霊ですか？」

「そう呼ばれることもあるわ」

彼女はただ、微笑んでそう言う。

「で？　なんでここに居るんです？」

「目が合ったから。私を見つけられたのはあなただけなの」

彼女は嬉しそうに笑った。

「可愛い本屋の店員さん。編み物がしたいのだけど、本を買うことも毛糸を買うことも出来ないわ。だって、店員さんが気付いてくれないのですもの。だからと言って万引きはよくないわ。だから」

私の変わりに本と毛糸を買って来てくだらない？

彼女の始めの要求はそれだった。

客人は温かく出迎えましょう

ディアーナと名乗った彼女はいつの間にか私の部屋を居住地とし始めた。

「えっと、食事って出来ます?」

「ええ、すり抜けるだけなら味は分かります」

つまり消化は出来ないと言っことで。

「じゃあ、食べなくて良いんですね。うち、貧乏なのであんまり用意できませんから。一人分増えるのって結構大変なんですよ」

時々華やかに、そして儂く輝く彼女はもしかしたら女神かもしれない。

なにやら宗教画に出てくる聖母のようにも見えるし、チャードリ―を身に纏った女性にも見えなくも無い。彼女はどうやら、その時の気分で、私に見せる姿を変えるらしい。

「それで? 貴女はいつまでここに居るつもりですか?」

「私が居ては迷惑かしら?」

「いえ……」

どうも断りづらい。

この人の独特の雰囲気がそう思わせるのか、どうもこの人は苦手だ。

そんな彼女の前で、チョコレートを口にしてしまうと、じっと、見られる。

落ち着かない……。

「ねえ」

「何です?」

「それ、どんな味がするの?」

「どんな味って……」

興味津々だ……。

「食べます?」

「食べられないの」

「味はわかるんでしょう？」

「いいの？」

「は、はあ……」

もう嫌だ。この人の相手。

酷く疲れる上に、万が一神様とかだったら丁寧にもてなさなきやいけないんだろうし……。

「客人はもてなすべきだと？」

「そうね。それに越したことはないわ」

「押しかけて来た相手でも？」

「客人は客人よ」

ディアーナは本当に柔らかく微笑んで言うが、どうもずっずっしく見える。

「こっちは来てほしくないよ」

「それでも来たものは仕方ないわ」

「ふうん」

本当に。嫌な人。

だけでも、行っていることは間違っていないような気もしくはもない。

「もてなし、ねえ」

「相手を思いやるのが大切なのです。別に豪華なごちそうとか派手な催しをすることはありませんが、わざわざ足を運んでくださった客人への感謝とねぎらいが大切なのです」

「……言うことは分かった。けど、あなたに言われると何か違う気がするの」

本当に。

言っていることはあっているような気がするけど、この人が言うのは違うはずだ。

なんだかすごく複雑な心境だ。

食べ物は大切にしましょう。

日本人は本当にイベントが好きだと思う。ヴァレンタインやホワイトデー、オレンジデーなんていろんな業界の陰謀としか思えないようなイベントごとに沢山のお金と時間を使う。

まあ、本屋のアルバイトには関係の無い話だろうけど。

「はあー、ラッピングだるっ」

卒業祝いだか入学祝だかが終わってもラッピングは終わらない。

そもそも、最近は本かすら怪しいもののラッピングが多い気がする。

「それ気をつけないと音鳴るよ」

「さつきやらかした。なんかいきなり喋り出してびっくりしちゃったよ」

英語絵本だか何だか知らないけど、音鳴るものはスイッチを切ってから店頭に並べてほしい。

いや、並べるのもこっちなんだけど。

「お腹空いた」

「あと十分頑張れば帰れるでしょ？」

「うん。けどその十分が長い」

客が少ないこの時間は本気でそう思う。

一分一分が妙に長い。

そんな時だ。

またあの女が居る。

「げっ……」

「どうしたの？」

「いや、めんどくさい客発見かな？」

他の人には見えないからこそめんどくさい客。

本当に厄介だ。

「お客様に向かって失礼でしょうが」

「あー、お店のお客様じゃなくて、うちの客人。なんか付いて来ちゃった」

「それでも店内に入ればお客様だから我慢してスマイル」

ああ、こいつもうぜえ。

そう思った時、上がりの合図。

「お先にしつれーしまーす」

ああ、これから帰宅だと思つとさらに気が重いのは何故だろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4665p/>

女神と私の108の約束

2011年9月30日03時19分発行